


在外研究員研究報告書

2020年 11月 5日 受付

所 属	グローバル地域文化学部	氏 名	尹 慧 瑛	
職 名	准教授			
研究課題名	グローバリゼーションの時代における「社会の共有」			
研究期間	2019年 3月 30日 ~ 2020年 3月 23日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2019年3月29日 ~2020年3月22日	イギリス	ロンドン大学クイーン・メアリー校 地理学部	
研 究 費	3,066,000円	研究成果の概要		別記 4,000字程度
発    表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日
	「ブレグジットと南北アイル ランド国境問題—英愛関係の 試練」	『歴史学研究』第990号		2019年11月
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日
	「在英アイリッシュに会う とき」	『抗路』第7号		2020年7月
	演 題	講 演 学 会 名		講演年月日
‘Place, Identity and Reconciliation’	School of Geography Research Seminar, Queen Mary University of London		2019年11月20日	

## 研究成果の概要

グローバル地域文化学部

尹慧瑛

わたくし尹慧瑛は、2019年3月より一年間、グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国のロンドン大学クイーン・メアリー・カレッジの地理学部にて、在外研究の機会を得ることができた。以下、この間の研究活動と成果について述べる。

在外研究期間における研究テーマは「グローバリゼーションの時代における『社会と共有』」であり、2007年に単著を出版して以降なかなか次の段階に進めないまま温めてきた問題関心をもとに、いくつかの問題群に具体的に分け入っていくための文献収集・予備的調査・学術交流ネットワークの形成に努めた。

在外研究先では主に以下の3つの研究拠点を得た。まず一つ目は、受け入れ先機関であるロンドン大学クイーン・メアリー・カレッジ (QMUL) の地理学部 (School of Geography) である。受け入れをご快諾くださったキャサリン・ナッシュ教授が率いる人文地理学のデパートメントには、国境や移民・難民問題から環境問題まで多種多様な背景・関心を持つ優秀な研究スタッフが多数おり、定例の研究会やセミナー、小規模の研究プロジェクトグループなどを通じて豊かな研究交流を行うことができた (そのうちの一回で発表の機会を与えられ、多くの貴重なコメントを得た)。また招聘研究員として共同研究室、PC、QMUL およびロンドン大学の他カレッジへの図書館へのアクセス権を得るとともに、スタッフの一員として授業やミーティングへの参加の機会も得ることができた。QMUL はリベラルかつ先進的な取り組みで知られるが、とりわけ地理学部は驚くほど開かれた自由な環境であった。研究のみならず、学部運営、学生の教育、FD など、国を越えて共通する大学人としての様々な課題について意見交換をできたことはまたとない経験となった。なお、地理学部では年に2回、丸2日をかけて、有期スタッフも含めた全教員および院生の短い研究報告会を実施し、また、隔週で水曜午後に研究プロジェクトの実施に当てるなど、問題関心の共有や研究時間の確保に努めており、本学・本学部でもぜひ実現したいと思わせる試みであった。

二つ目は、居住地のケンブリッジである。ケンブリッジ在住のブロンウェン・ウォルター名誉教授 (アングリア・ラスキン大学) は、在英アイリッシュ研究の先駆者であり、渡英前より親交があったことから、ケンブリッジのいくつかのカレッジを拠点とするアイルランド関連の研究会にお誘いいただいた。これらの場を通じて、第一線の専門家から新進気鋭の若手研究者、留学生を含む大学院生などとともに、アイルランド研究のダイナミックな現況

を窺い知ることができた。京都と似て、内外の著名な学会がケンブリッジの各カレッジで開催され、また数多くの研究者が講演や研究報告を行うこと、QMULの招聘研究員という身分から、UKで3番目の蔵書数を誇るケンブリッジ大学図書館へのアクセスが可能になったことも、限られた滞在期間のなかで多くの文献や議論に触れるチャンスとなった（なかでも、北アイルランドの和平交渉に尽力した歴代の北アイルランド担当大臣を招いてのシンポジウムに自宅から徒歩10分で参加できたことは、このうえなく貴重な機会であった）。

三つ目は、在英アイリッシュ資料館（Archive of the Irish in Britain）である。イギリスでの在英アイリッシュ研究の進展に大きく貢献してきたトニー・ミュレイ氏が館長を務めるこの資料館には、会館準備期間であった前年の夏にすでに訪問を済ませていたが、在外研究期間中には、資料の所蔵状況の全容と、資料館設立にいたるプロセスそのものも研究の重要な対象と考え、ワークショップや記念行事に積極的に参加した。その中で、在英アイリッシュの支援団体である「アイリッシュ・イン・ブリテン」の活動内容を知ることとなり、その本部オフィスへの訪問や運営スタッフへのインタビューが可能となったことは、今後の研究を進めていくうえで大変有益であった。

最後に、ブリテンおよびアイルランド各地でのフィールド調査についても述べておきたい。6月の南北アイルランド国境地帯を巡るフィールド調査を皮切りに、9月にはアイルランド共和国側の国境近くにあるダンドークでの国境問題についての国際シンポジウムに参加、10月には北アイルランド、クイーンズ大学主宰のアイルランド研究セミナーに複数回参加、またアイルランド共和国のダブリン、ゴールウェイ、北アイルランドのデリー、ベルファストを訪問、翌年1月にはイングランドにおけるマンチェスター、リヴァプールなどアイリッシュ・コミュニティを抱える工業都市を訪問した。これらはのちの資料調査やインタビュー調査の土台となる予備的な調査であると同時に、人的ネットワークを形成することを主眼としたものであった。特に、ブレグジットを間近に控え、ブリテン・アイルランド関係が大きく変化しつつある中で、文献調査のみでは知り得ない各地の最新状況や、研究者、地域の人々の生の声を聞くことは、研究のフレームワークやモチベーションに大いに影響をもたらした。

以上の研究活動をふまえ、特に2つの大きな問題関心であった「南北アイルランド国境問題」と「在英アイリッシュ」について、2019年10月と2020年7月にそれぞれ論文を発表した。また、この状況下での北アイルランドをめぐる位置づけの考察も含んだ研究プロジェクトを構想し、2021年度より科学研究費（基盤研究C）の助成を受けることができた。なお、在外期間の最終段階である3月中旬以降、イギリスでも新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化してきたため、予定を1週間ほど早めて現地を後にした。

一年の在外研究期間中には、学部およびコースの同僚の先生方に多くのご負担をかける

こととなったが、研究の次のステップに踏み出す大いなるきっかけを与えていただき、心より感謝申し上げたい。この経験を日々の教育活動や学部運営にもしっかりと還元していきたいと考えている。